

2

デジタル教科書の活用

広島県尾道市立向東小学校教頭

藤井浩治



授業のねらいを達成し、児童の思考力・判断力・表現力を高めていくためには、多様な教材について指導方法を工夫することが望まれます。今回は、デジタル教科書の活用について、具体的な授業の進め方を示しながら提案したいと思います。

はじめに

教育の情報化に関する政策に伴い、各学校への電子黒板等の整備が進み、地上波デジタル放送への移行から、多くの普通教室にデジタルテレビが配備されるようになりました。これにより、以前に比べて、授業でデジタル教科書を活用することができるようになります。

書写は、文字の部分や点画の組み立て方を「視覚的」に考えたり、確かめたりする場面が多い教科です。その意味でも、

デジタル教科書の活用によって、より授業を改善できる可能性のある教科だといえます。そこで、今回は「書写デジタル教科書」を活用した授業の例をご紹介します。

2 原理・原則を
発見させる

例えば、算数の授業で、公式を先に教えてしまつては、児童の思考力を高めることにはなりません。書写の授業におい

ても同様です。文字の原理・原則を児童に発見させるプロセスの中に言語活動を設定することで、自らそれを発見した驚きと喜びから、児童の文字に対する関心・意欲を高めることができるのです。

原理・原則を発見させるという視点での授業を考えてみましょう。

(1) 画の接し方

▼「画の接し方」の原理・原則

教科書四年に、「点画の組み立て方を考えて書こう」(P8)という単元があります。ここで児童に身につけさせたいの

は、「画の接し方」の原理を理解し、原則を日常の場面で活用する能力です。

図1のように、「□」(四角囲みの部分)の中に点画がない場合、二画目「折れ」と三画目「横画」が連続することから、次の画へと速く連筆するために「折れ」

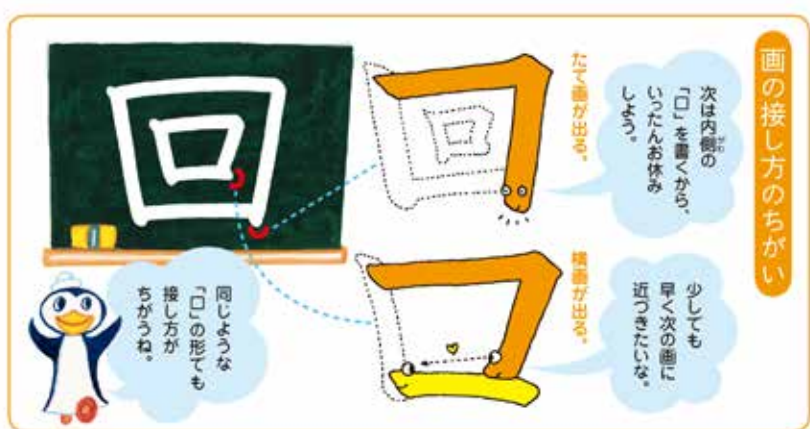


図1 「画の接し方のちがひ」(『書写』教科書4年P8より)。

の縦画が少し内側に倒れ、横画が出ます。これが、「画の接し方」の原理です。

そして、「画の接し方」の原則とは、「□」の中に点画がない場合は最終画が横に出て接し、「□」の中に点画がある場合は縦画が出るように接するということです。

▼漢字カードを使用して

「画の接し方」の原理を理解させ、原則を活用する能力を育成するためには、教え込みの授業からの脱却を図りたいものです。そこで、私は、児童に原則を発見させる工夫として、漢字カードを活用しています。

まず、図2-1のような「足」のカードを見せて、「丸で囲まれた部分の接し方では、二画目の縦画が出るでしょうか。三画目の横画が出るでしょうか。それぞれ、挙手しましょう」と発問をします。カードの裏には、正解を書いておき(図2-2)、裏返して正解を確認します。

次に、図3-1のような「国」のカードを提示して発問し、裏返して正解(図3-2)を示します。

それから、同様にして「目」「石」「口」「日」「田」「古」、計八枚のカードについてクイズのように楽しみながら、それぞれに「横チーム」と「縦チーム」に分類



図3-1



図3-2



図2-1



図2-2

し、板書します。そして、「横チームに共通していること、縦チームに共通していることは何でしょう」と発問します。児童は、「分かった! 横は、『□』の中に点画が何もない」「『□』の中に点画があるのが縦だ」と、原則を発見していきます。

▼デジタル教科書のツールを活用して

このような漢字カードの使用は、どうしても準備に手間がかかってしまうため、できれば教科書を使って授業を展開したいところです。しかし、教科書には、当然、原理・原則の答えが書かれてしまつています。そこで、デジタル教科書の出

ふじいこうじ
藤井浩治
広島県生まれ。2008年度まで広島県尾道市立土堂小学校に勤務。陰山英男校長在籍の3年間、教務主任として土堂改革に取り組み、数々の成果を上げる。光村図書小学校・中学校『書写』教科書編集委員を務める。

姿勢・執筆の定着は、書写の学習の基礎・基本として重要な指導事項であるとともに、定着が難しいものの一つでもあります。定着を図るため、鉛筆の持ち方や姿勢について示した図が教室に掲示されているのをよく目にします。これは、児童には、言葉で指導するよりも、視覚的に指導するほうが、効果が高いためです。

「書写デジタル教科書」には、横から

3 姿勢と執筆の定着

色を使って視覚的に分かりやすく提示することで、押さえるべきことを全員で共有でき、児童一人一人の書き込みの作業が確実となります。

ツールを使い、図10のように、教材文字に枠や線を書き込んで提示します。ペンやマーカーの色や濃さ、太さは自由に設定ができます。「たれ」を赤い透明マーカーで、中の部分を青い透明マーカーで囲み、「たれ」の中心を赤いマーカーで示しました。もちろん、児童にも、同様に教科書に鉛筆等で書き込みをするように指示します。

▼ツール・動画を活用して
「たれ」の組み立て方の原理・原則を児童に発見させるには、図8のように、デジタル教科書の書き込みツールの四角枠を使い、教科書紙面の原理・原則の解説に当たる部分を隠して提示します。
教師「『店』『歴』『病』『屋』の四つの漢字を見てください。いろいろな『たれ』がありますが、全ての『たれ』に共通していることは何でしょう」
児童「四つの漢字は、中に入っている青い部分が全部右に寄っています」

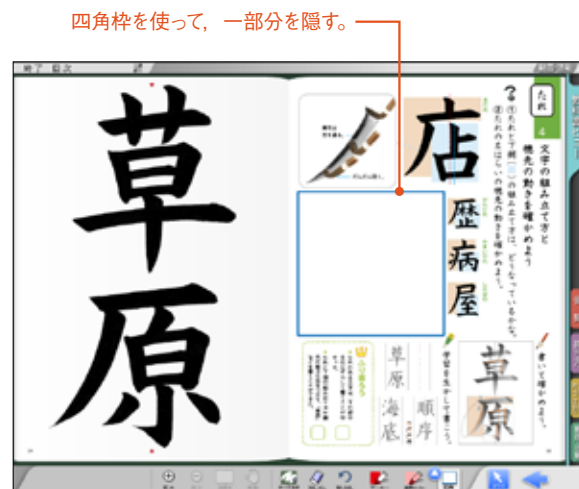


図8

教師「正解です。『たれ』の原則は、『たれ』に収まる中の部分を、文字の中心より少し右に寄せて組み立てることです」
さらに、デジタル教科書には、「たれ」に中の部分（占）がぶつかっているアニメーション（図9）が収録されています。これを児童に提示すれば、視覚的に原理を理解することができます。

▼教材文字に書き込んで
「たれ」の組み立て方の原理・原則を



図9

理解したところで、毛筆教材「草原」を使って、原則について確かめ、定着を図ります。
ここで、すぐに半紙に書かせるのではなく、教科書の教材文字の上から、鉛筆等で原理・原則を書き込ませることが重要です。そうすることで、学習した「たれ」の組み立て方の原理・原則が実感できるとともに、繰り返し意識して書くことが期待できます。

デジタル教科書は、このような場面でも活用することができます。書き込み



図10

についての動画資料が収録されています。これを毎時間、授業の最初と終わりに流しておけば、用具の取り扱い方が分からない児童は、動画を見ながら、準備や片づけを行うことができます。ちょっとした工夫ですが、ぜひ活用したい使い方です。

5 おわりに

「書写デジタル教科書」を活用した授業の展開例をいくつかご紹介しました。冒頭でも述べましたように、視覚的に示すことで、児童の思考や理解が深まり、知識・技能の定着が期待できます。

また、動画資料は、書写指導に苦手意識をもつ教師にとって心強い味方となります。そして、授業の工夫・改善のアイデアが出てくるのは、その苦手意識から解放されたときなのではないでしょうか。書写動画などの資料は、学習指導書にも付いていますので、活用してみるとよいでしょう。

4 用具の取り扱いの徹底

書写の授業は、用具の準備や片づけに時間がかかってしまうことが多々あります。特に、三年生で初めて毛筆書写の学習が始まったときには、準備や片づけの定着が急務となります。

しかし、教師による指導を毎時間繰り返し、徹底させることは、現実的には難しいものです。「書写デジタル教科書」には、用具の準備のしかた・片づけ方に